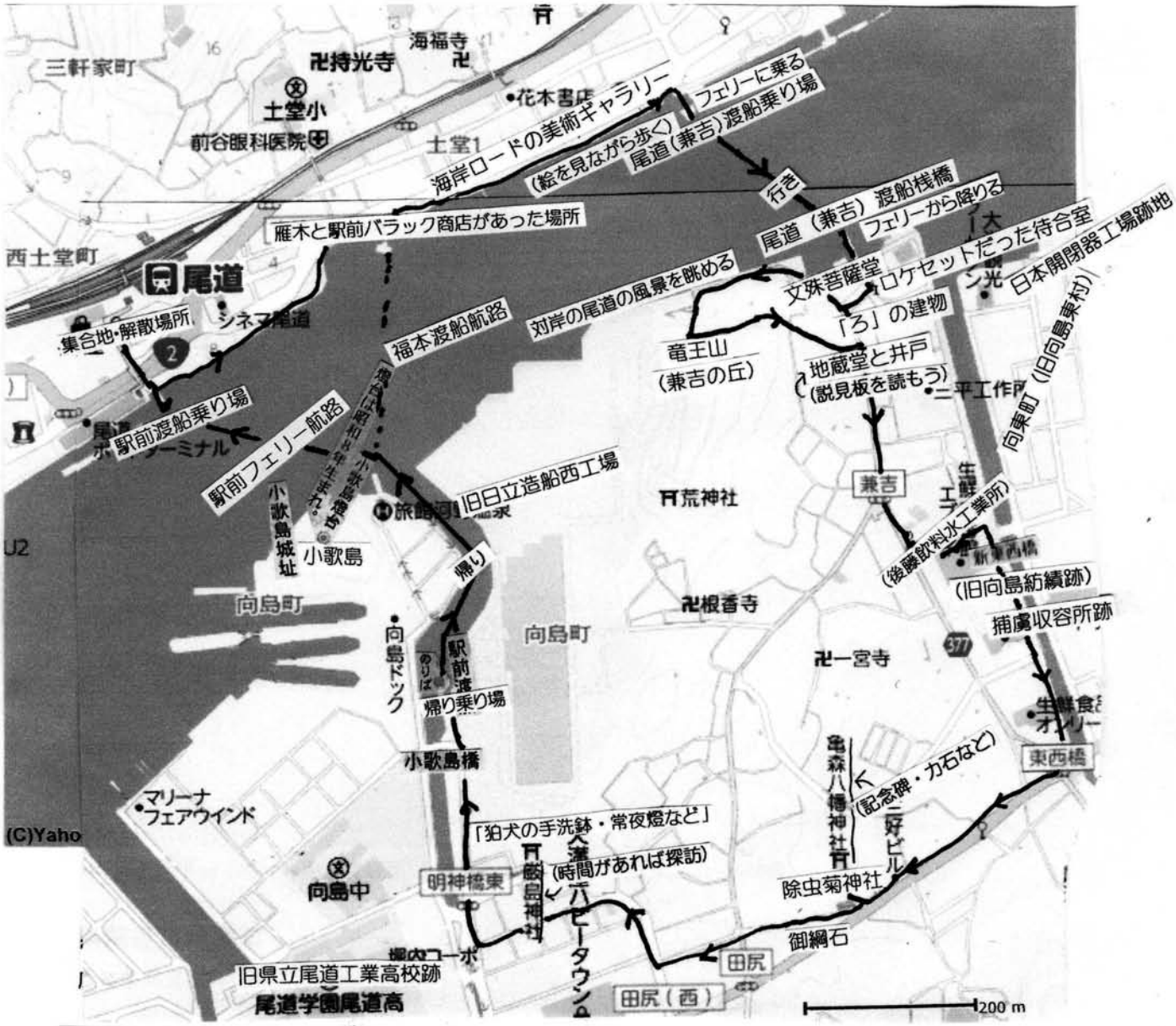
ぶら探訪　その37

尾道歩きパート５　尾道対岸「向島兼吉周辺」を歩く

日本遺産になった古き町尾道風景と「尾道水道の空気と光景。そして山の緑、波、風、香り」などを感じながら、向島兼吉の「ぶら探訪」を楽しみましょう。

【探訪地・見学コース】

① 海岸を通り兼吉渡場へ　②ロケセット「待合所」　③「ろ」の建物
④文殊菩薩堂　⑤龍王山（兼吉の丘）・尾道水道の風景　⑥地蔵堂と井戸
⑦兼吉の町歩き・向島捕虜収容所跡の碑・入川と東西橋　⑧亀山八幡神社と石造物など　⑨除虫菊神社　⑩御綱石　（時間の関係で「厳島神社」は見て通過）



平成27年（2016）3月5日(土)　備陽史探訪の会

案内者　岡田　宏一郎(近世近代史部会)

（現在の尾道駅前風景と昭和 20 年代末の写真と比べてその変貌を感じて下さい）

前回のぶら探訪尾道パート4で見た駅前の風景。

昭和 20 年代末頃の尾道駅前
「なぎさの女神像」が駅前の象徴だった

写真は「郷土写真家　土本壽美写真展」より転載。
昭和 28・9 年頃の駅前風景　看板やオート三輪、バス、車に注目

駅前から見た小歌島（おかじま）の風景。ここは私有地になっているため入ることができない。　ここに村上海賊の出城があった。今は陸続きとなっているが以前は島であった。

小歌島の灯台は昭和 8 年に出来る

海蝕崖の穴が舟隠しとして使われていたという。

対岸は「日立造船　西工場」であったが、今は他の企業が使用している。　以前、ここで戦艦大和のロケがあり、実物大の主砲などは迫力があり、見学された人もいたと思う。

駅前の海岸広場から見た「箱庭的な尾道水道」の風景。

整備された雁木。以前はこの雁木まで戦後のバラック建築が軒を並べていたが強制撤去された。

改修される前の雁木の風景

ここでTVの鉄板ロケがあり、主人公が海に飛び込んだ場所である。

海岸ロードは「おのみち海辺美術館」のギャラリーとして「海辺や坂道、路地、町並み風景」など、どれをとっても郷愁を得られる「絵のまち尾道四季展」である。　これは「尾道水道の印象」(中村琢二)の作品である。

向島側から見た「尾道眺望」(中根　寛)の絵である。

兼吉渡船の桟橋そばにある「てっぱんのロケ風景」の写真。

千光寺登山道の立派な石垣(中央)　通称「天春」の石垣といっている。右に天寧寺の塔が見える。

渡船から見た浄土寺山(瑠璃山)と尾道市役所の庁舎。

尾道水道の駅方向の風景。　海からの風景と潮の香も尾道の「日本遺産」である。

対岸の向島兼吉の龍王山の丘。ここにも行きます。

桟橋に近づいた。　以前言っていた「ろ」とある建物。　和船の「櫓」を今も作っている。

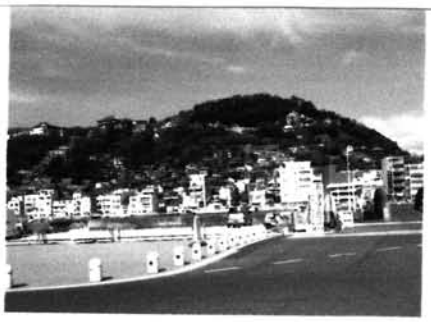
向島の兼吉に着いた。レトロな待合室の建物。　これは映画「あした」で「浜の待合所」として使われたセットを新装して「バスの待合所」として使っている。

大林宣彦監督作品の「ふたり」「あした」ロケ地[向島]のイラストマップ。

待合室の内部。　右下の写真が「ロケのときセットされていた風景」

映画「あした」で使われた「呼子丸」の写真。撮影後尾道渡船(通称兼吉渡し)の桟橋に係留されていたが老朽化が激しく2000年8月に浸水し沈没した。

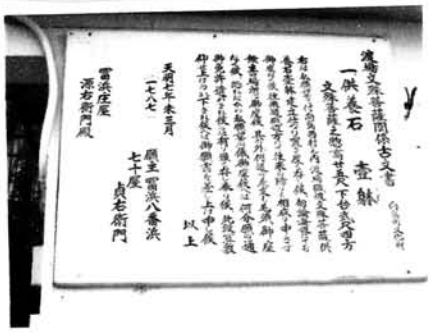
呼子丸の浮輪と連絡船乗り場の看板。



向島側から見た千光寺山と海岸の町並み風景。

尾道水道と市役所方向の風景。

あの「ろ」と書かれていた建物の内部。櫓を今も作っていることが分かる。



渡場文殊菩薩関係の古文書の説明板。「渡場の文殊菩薩　供養石　壹躰」を建立したとある。天明七年未三月(1787)　願主は「冨浜八番浜七十屋　貞右衛門」冨浜庄屋　源右衛門　殿」となっている。

知恵の文殊菩薩の建物と小絵馬。

秀山荘の横を通って52mの龍王山に登る。ミカン畑の間を通るみかんの香りがしてきた。

標高52mの龍王山(兼吉の丘)から見た尾道水道と市街地の風景。　この風景と香り、風、波、山も日本遺産を構成している要素だと思う。

ここ(龍王山)が「兼吉の丘」として映画「あした」のロケ地であった。

「龍王神」の碑と「椙原八幡宮元文(?)旧蹟」の碑がある。

向東町の方向を見る。　正面あたりにチャック(ファスナー)と云っていた「日本開閉器」の工場があった。

龍王山から別の急坂の道から下ると「高鶴大明神」の登りと祠があった。

「木造地蔵菩薩立像」の説明板。　これには「天文年中　泉山城主宮陸介元清が毛利元就に攻め落とされ弟の宮元春佐賀田城主有地氏の家臣有地玄蕃頭に頼ったが神辺城主杉原森重に攻め落とされ、玄蕃、元春と共に兼吉に落ちのび落城のとき玄蕃が左眼を射抜かれ命拾いをしたのは信仰して城内に安置している地蔵菩薩のおかげとこの像を背負い自分の住居に安置していたのを乞うて現地に地蔵堂を建立して安置したものである。と書かれている。

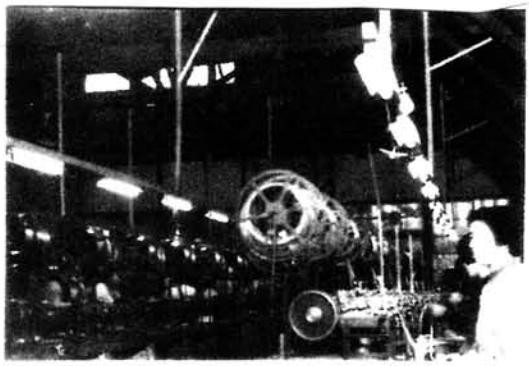
下ったところに井戸があった。「地□井」とあり、和暦と多くの人名が刻まれている。

井戸の上にある「地蔵堂」

P 15 の資料を参照(備後向嶋岩子島史より)

屋島寺のお堂。向島には八十八ヶ所お大師めぐりが盛んである。

路地を出ると兼吉の商店街通りに出た。だが町並みは大きく変貌していて昔の面影がなくなっている。

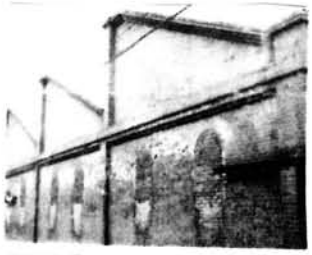


日本開閉器有限会社

こうした以前からの家屋もあり、「日本開閉器」の街灯がまだ残っていた。昭和40年代には工場がなくなっているのに、まだ名残が見られた。

分かれ道に出た。左の道が兼吉の大通りで、右が昔の田舎道であった。今は道も広く変わっている。

この家は以前からあった昔ながらの大きな家屋である。



レンガ造りの「旧向島紡績工場跡」にある記念碑。現在はスーパーなどの大型店舗となっている。　この碑は「向島捕虜収容所」として戦時中約200名あまり収容され造船所で働いていた。終戦後、すぐにパラシュートで捕虜に向けて食糧などが投下され、そのぜいたく品に日本人はうらやましがった。

「後藤飲料水工業所」昔のまま残っている。　懐かしい「ラムネ・サイダー」や「ミルクセーキ」を今も製造・販売している。

P 12 の資料を参照

向東町（左）と向島町〈右）を分ける入り川。入り川は島の南端の千汐の集落まで小さな溝川となって続いている。

この東西橋で東村〈向東町）と西村（向島町）に分かれている。　向こうが向東の市街地で、しまなみ街道の高架橋が見える。

亀森八幡神社の境内入り口。「縣社八幡神社」の標柱が今も建てられている。昭和二年六月とある。

燈籠には縣社と刻まれ「石工　要福地」と名前がある。

ここから入って行く。鳥居には「明治丁未」とある。　これは「明治40年」である。

能舞台がある。

奥にあるのが「稲荷社」である。

樹木に隠れている「日露戰役記念碑」を見る。海軍大将安保清種謹書とある。

奥に行くと立派な「忠魂碑」があり、大切に守られている。

拝殿横の境内社を見る。

「征清凱旋碑」があり「明治二十九年九月建立」とある。

阿形の狛犬を見る。

拝殿前にある「叉石」(？)を見る。「頭取　朝日方　叉石」とあり「吉原恒平」の名前が刻まれている。

「北清事變戦役凱旋紀念碑」　元帥山縣有朋とあり「明治三十五年五月建之」で発起人と凱旋者の名前が刻まれている。

拝殿を見る。

和船の「櫓」が奉献されている。平成二十四年一月二十七日と新しい。

「八幡宮オハキ神事」の説明板。 尾道市の無形文化財指定になっている。（詳細は読んでください）

式家神社。

こちらは「高良神社」。 ここを上がって行くと除虫菊神社がある。

向こうに見えるのが「除虫菊神社」である。 左が除虫菊神社とある標示柱である。鳥居の柱には「昭和三十五年十二月建之」の刻銘があった。

酢瓶を切って燈籠にしている。これは面白い。

除虫菊の説明板。 これには「和歌山県出身の上山英一郎が明治19年にアメリカのH・Eアモア氏から除虫菊の種子を贈られ、国内栽培を奨励し輸入ノミトリ粉の国内生産化をはかりやがて渦巻型の蚊取り線香を発明した。尾道では明治29年頃から栽培が始まった。尾道、因島など瀬戸内海の島々の主要産業振興に貢献した」と書かれている。

除虫菊神社の社殿。 千光寺公園に上山英一郎の「頌徳碑」があり、尾道市立美術館下の斜面に除虫菊が栽培されている。

神社を出ると道路の向かい側に「御綱石」がある。かつてはここまでが海だったから舟を繋いだ石であろうか。

帰る途中に見えた「常夜灯」 金刀比羅宮，とあり「明治十二年十月」とある。

東富浜の「厳島神社」

（ここは時間があれば探訪しますが、予定では眺めながら通過する予定です）

境内には狛犬が乗っている手洗鉢がある。これには「天保六乙未十二月」とある。 後方の常夜燈には「文化三丙寅歳九月 富島元俊」とある。

厳島神社の狛犬。 台座に天保季歳□□□秋九月」とあった。 また「松浦屋儀十郎 蔦屋權七」の名もある。

もう一方の狛犬には「石工 勘十郎春延 作」とある。尾道石工による狛犬である。

時間がかかり過ぎたので寄り道をせず帰る。帰りはここから駅前渡船に乗る。

懐かしい昔の写真

郷土写真家、土本壽美写真展より転載。〈以下同様〉
1万トン級の大元丸の進水式。波が海岸の家屋まで打ち寄せ海岸に衝突するかと心配されたがうまく舵を切って無事だった。「行」の看板は「住友銀行の〈行〉である」 手をふているのは女子銀行員である。

日立造船向島工場[西工場]の空中写真(昭和43年以降)

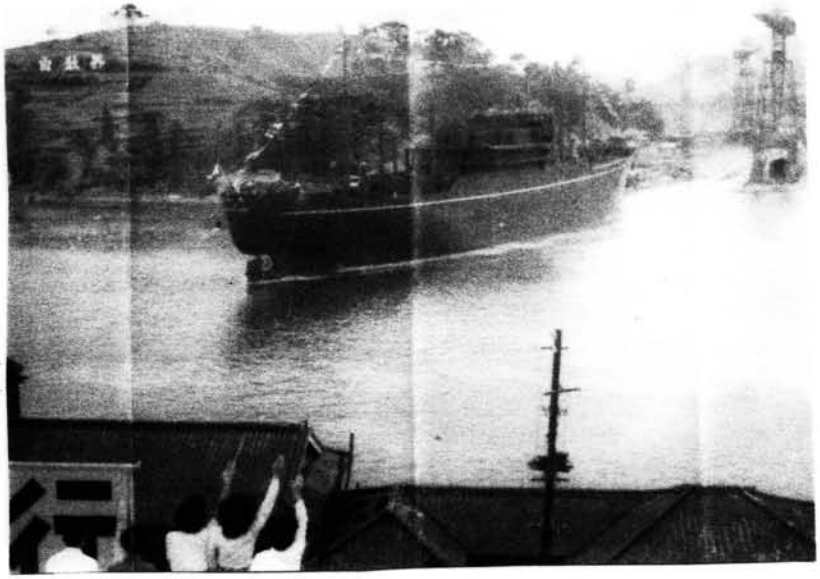
造船が盛んな頃の向島西工場。

日立造船向島東工場。現在は看板あたりに尾道大橋が架かっている。左に捕鯨のキャチャーボートが停泊している。〈昭和30年代か？〉

日立造船向島工場[西]の最後の進水式〈昭和53年6月20日〉

昭和17年の兼吉道路が拡張された風景。

賑わう兼吉渡し場の風景〈昭和20年代〉



左上の写真をよくわかるようにもう一度掲載(昭和 30 年代頃か？)

対岸の尾道駅前市街地から見た小歌島

左側の海が埋め立てられ造船所になっている。
(昭和７年亥埋め立てられ陸続きとなる)

小歌島の風景
(右側の建物は美ノ郷村役場として移築される。
現在は藤井川公民館として使われている)
尾道‥‥セピア色の記録より転載

元美ノ郷村役場の建物。現在は「藤井川公民館」となっている。以前は「豊田菊吉」氏が所有していたもので小歌島にあったが美ノ郷村役場として移築された。

資料（A）

天春の石垣

対岸の向島側から見る尾道市街の風景は、今まで歩き見てきた街並みとは違った印象深い光景に魅せられる。その中で千光寺道にひときわ目立つ端麗で立派な石垣が見える。

また「御袖天満宮」の石垣も素晴らしく尾道石工の優れた技を見ることができる。

その中で住宅に築かれた石垣として「天野春吉の邸宅跡の石垣」（通称天春の石垣）はその代表的な石積みとして有名である。

高さ「約 15m」、長さ「約 40m」もある。この石垣はかつて乾物屋を営み、大陸にも広大な農園を所有していた天野春吉が千光寺山の石を切り出し私財を投じて築かせたものである。石垣の北端に大正 15 年 1 月に建之された天野春吉の「頌徳碑」がある。それは天野春吉が石垣を築いた後の大正 6 年～10 年にかけて、人が一人しか通ることができなかった谷道に「千光寺新道」を設け、防火のため貯水槽二基を建造したその功績を讃え住職や商家の六人が発起人と建てたものである。

またそばに小さな碑がある。この碑には大正 15 年に天野春吉によって道路整備がなされ共用水栓二基が寄贈されていることが刻まれている。

千光寺道を上がって行く時には、あの石垣とともにこうした碑にも注目して見よう。

引用･参考資料（郷土の石ぶみ　山陽日日新聞社）

赤レンガの捕虜収容所跡の記念碑

向島町と向東町の境の入り川のそばに（向島町側）に赤レンガの向島紡績工場が数年前にはのこぎり型のレンガ工場があった。今は取り壊されスーパーなどの敷地になっているがドラッグストアー側にレンガ壁の一部が残され、この壁に金属製のプレートの記念碑が取り付けられている。

記念碑には次のように表示されている（英文でも）　「1942 年 11 月イギリス軍捕虜 100 名インドネシアより移送される。病気などで 23 名が死亡。　1944 年 9 月アメリカ軍捕虜 116 名フィリピンより移送される。　1945 年 8 月終戦。
翌 9 月捕虜 193 名解放される」とあり『世界の恒久平和を願い』この史実を記す。2002 年 3 月（日英友好のモニュメントを建てる会）と書かれている。

【その時の参考資料として山陽日日新聞の記事を転載しています】

今は当時の赤レンガ工場が取り壊され当時の面影を感じることができないのが残念である。

レンガ工場のレンガはイギリス製でイギリスから軍艦で運んできたのではないかといわれている。　レンガ工場は大正七年に建設され、当時は松本帆布工場あった。　レンガ工場は向島紡績工場として長年操業されており、戦時中は捕虜収容所としても使われていて、捕虜たちは造船所などで働かされていた。

だが、終戦になり状況は一変した。「終戦翌日から突然飛行機が来て空からパラシュートで何か落として行った。子供たちが珍しがって落下地点へ行こうとすると大人達が制止した。それは向島の紡績工場の捕虜達への物資だったそうで、当日朝関係自治体から住民へ『関係の者が取りにゆくまで触らないように』連絡があった。　実際に見せてもらった人の話によれば、箱の中には服や食料が詰めてあり、パラシュートをもらった人もいたようで、このパラシュートもロープも丈夫で色々なものに使えて後に大変重宝したそうだ。　このパラシュート作戦はその後、向島を離れるまで一週間続いて終わった」と書かれている。（歴史ジャーナル　NPO法人尾道文化財研究所）　この話は年配の人から、当時は貴重で贅沢であった「チョコレートや肉の缶詰などが入っていてうらやましくて仕方がなかった」と聞いている。

資料(B)　**向島の農業・工業について**（おまけの短い資料）

向島は島なので田地はほとんどなく段々畑が中心で、以前は甘藷（サツマイモ）と麦を中心とした農業であった。除虫菊がダメになるとかんきつ類が中心を占め、五月末～6月初めには全島が蜜柑の花の香りに包まれ気持ちのよい季節に心が和んだものであった。またワケギや洋ラン、カーネーションなどの花卉類などが栽培されていた。平地は海面の干拓・埋め立てによって塩田が広がっていたが、それもダメになった。戦前はイモが中心であったから農村工業ではでんぷん工場が多く見られた。または帆布工場も向島の特徴的な産業であった。近代的な工業としては造船業である。造船と云えば「日立造船」であるが、前身は大正二年向島住人水野常吉水野船渠造船所に始まる。大正七年に向島船渠になり、のちに大阪鐵工所が買収し昭和15年旧尾道船渠を買い取り西工場として設備を拡張した。昭和18年には大阪鐵工所は日立造船株式会社と社名とを変えた。

西工場は呉海軍工廠の分工場に指定され、戦車接岸上陸用の二等輸送艦（ＳＢ艇）の建造専門工場になった。昭和20年には海防艇丁型の建造をしたが三隻を建造中に敗戦となった。現在日立造船西工場では船を建造していない。

なお、兼吉の市街地を歩くと懐かしいラムネ・サイダーやミルクセーキを今も製造している「後藤飲料水工業所」がある。向島の清涼飲料水は「大正12年、坂井某が向島江奥に於いてラムネ、サイダー製造に當つたのが始めであるが、目下は閉止して、同村兼吉三町目後藤清涼飲料水製造所が出来、ラムネ、サイダーに加ふるにシロップ製造を行ひ、島内は勿論、尾道、三原地方に多數の販路を占め、斯業の進展性見せてゐる」とある。

引用及び参考文献　「備後向嶋岩子島史　菅原　守編纂　昭和十三年」

資料(C)

除虫菊について

以前、会報にて「除虫菊と除虫菊神社」について書いているが、今回のぶら探訪で「除虫菊神社」にも行くので再度簡単に紹介します。

除虫菊は明治初期にアメリカから導入され上山英一郎によって栽培指導が行われた。本格的な除虫菊導入に尽力したのは向島西村の藤田歳太郎である。藤田は「岸植栽培」を提唱した。それは畑の岸とか畦畔に除虫菊を植える栽培方法である。そのことによって「仮令価格が低廉ナル時期ニ遭遇スルモ経済上損失ナカラシメンコトヲ期シ」『広島県史』近代二）たからであるが、明治32～33年ごろには価格が暴落し栽培地が減少するなど、除虫菊栽培の停滞状況が続いていた。こうした状況から抜け出しはじめたのは日露戦争が契機になった。

各師団からの除虫菊の注文が相次ぎ、除虫菊価格が急騰したためで栽培が急増した。また上山英一郎が渦巻型線香を考案したことなどが除虫菊生産に刺激を与えた。さらに、明治40年ごろから海外輸出が本格化し、とくに第一次世界大戦期の欧州産の除虫菊の衰退によってわが国の除虫菊の輸出はアメリカを中心に急増した。こうしたなかで広島県の除虫菊生産も急発展を遂げ大正六年には有力産地の和歌山県を抜いた。この結果、北海道を除き西日本では最大の生産県に成長した。県内では向島をはじめ因島や豊田郡高根島村など瀬戸内海島嶼部が除虫菊の主産地となった。この要因には自然的・地質的条件が栽培に適していたからでもある。向島では秋期に苗床を播種し、翌春の三、四月ごろに幼苗を仮植床に移植して養成し、秋に甘藷を収穫した跡地に定植し、三年目の五、六月ごろに収穫するという方法が一般的にとられていたという。

向島西村には11人の産地商人（仲買・問屋）が存在していた。除虫菊の乾花はこうした生産地の商人が出荷し尾道の除虫菊問屋に引き取られ阪神や和歌山地方の貿易・製造業者に販売されていた。

除虫菊は太平洋戦争期には一転して後退していった。それは食糧増産によって作付が急減したのである。戦後、朝鮮戦争による需要で一時復活したが化学製品によって天然成分の除虫菊の需要がなくなり島々で栽培は終わった。かつて初夏五月に島々の段々畑を白く彩っていたあの光景は見られなくなってしまった。今は観光用に一部の地域で植えられているだけである。（千光寺の尾道市立美術館の下斜面には植えられているから初夏には鑑賞できる）

〔引用、及び参考資料「向島町史　広島県史　歴史ジャーナル（NPO法人尾道文化財研究所）」

資料（D）

小歌島（岡島城跡について）

向島には「岡島城跡・亀山城跡・丸山城跡・余崎城跡」の四か所の城跡が所在」とある。立地状況からみて水軍にかかわる城として築かれたものと推定できる。岡島城跡は尾道水道に向かって突出した標高 26mの独立丘陵に郭が配されている。昭和のはじめから公園造成工事や埋め立て工事・宅地化などによって、周囲はかなり破壊をうけているが、丘陵頂部の中心の廓とそれを取り囲む郭（帯郭）、西側と北側の海に面した部分のやや小さな郭の四つの郭が残っている。伝承によれば毛利氏の配下であった三島村上氏が 16 世紀後半に居城していたという。「向島町史　通史編（平成 12 年）」

現在は畑になっており、昭和の初期にはここで博覧会が開催されたこともある。だが現在は畑となっていて何もない。また私有地であるため入って確認することができないのが残念である。（立ち入り禁止の看板が立てられている。）

「図は向島町史・通史編より転載」（平成 12 年発行）

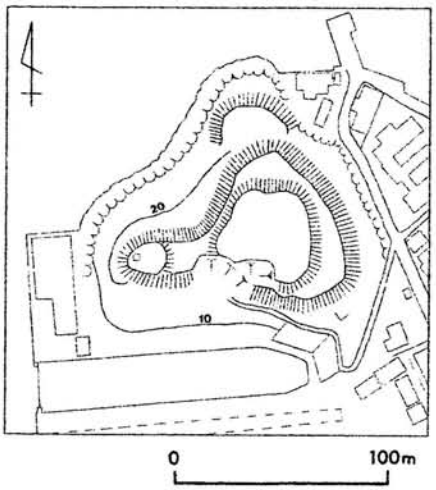


図2－2－25　岡島城跡略図（『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第3集、1995より）

資料（E）

備後向島岩子島史（昭和十三年）

●渡・場・地・藏、金・石・神・社・

兼吉渡し場に同所に二堂がある、堂も檜木造り、棟瓦に菊花御紋章八個を配し、形頗る優雅であるものに石大師尊を安置せられ、今一つの堂は地藏木佛を安置せられた二間四方の建物で頗る粗末であるが、三十餘年前、後方の土崩れの爲建物全潰以前は之も總檜木造りで古雅と密緻の彫刻に誰人も一驚せられ、明治初年頃專門家が新築に三千圓以上を要したものと云はれてゐた。此の二堂は元神宮寺の末寺となつてゐた。明治中年頃迄は堂守も居り、割庄屋屋敷が隣りで境内一段餘畝に及び、齡千年、方一町に蔽ひ擴がつた神松を始め大樹數本立並び、其下に眞清水滾々と湧き出づる井水があり、磯邊に接してゐるに耀らず淡水滿ちて柄杓を以て汲み呑みが出來、住民は勿論、尾道通ひの人々も必ず此處に喉を潤すといふ靈水、老人等は今も此の水の美味は忘れられぬと云つて居る。其の側に兼吉の地名が起つた金石即ち鑑石（トモノイシ）があつた。

天保年間、此の地先が埋立てられ現在の如く海岸迄約一町餘となり、人家密周せられ、全く氣付かざる樣になつてゐるが吉原文書によると、之が毎年の祭事は五日乃至七日間賑々數執行はれ、雜沓に雜沓を重ねるので、祭事取きめに隨分心配せられた書類が數通ある。そして當日は庄屋、組頭總出は勿論、人を制する警人多數を配して混雜を制し、恰も近郷一帶の大祭事の樣であつた事が伺はれる。

明治後期の小歌島付近

向島町史より転載

おまけの資料(1)　「山陽日日新聞」より

山陽日日新聞　1998年11月6日(金曜日)

2000年春までに市道拡幅完成

今回一気に30軒撤去へ

雁木は今ある石を積み直し再利用

海岸商マーケット

尾道市は五日、今年三月に続き、東御所町の共同長屋店舗（通称＝海岸商マーケット）の二回目の取り壊し作業に着手した。市道尾道駅前尾崎線（四工区）の道路改良事業に上るもの。

店舗は尾道海岸商業協同組合への加入、非加入の合わせて四十一軒あったが、尾道市との話し合いで円満解決、合意が進み、三月の一回目で八軒分を取り壊したのに続き、今回三十軒分を撤去する。

初日は市デザイン課職員が立ち会い、建物の様子を調べながら、業者が撤去作業にむけて仮囲いなどを設置していった。

本格的な撤去は十日ごろからで、今月末までには今回予定分の作業を終えたい意向。そして「現在も合意に至っていない三店舗について交渉を続けていきたい」（市デザイン課）と話している。

現在工事が進んでいる駅前の公園緑地帯での新たな営業を希望しているのは今のところ、三店舗で、すでに近くの仮店舗で営業を始めている。

市デザイン課と港湾課の話では、現在建物のある場所は市道尾道駅前尾崎線の歩道と、一部車道になり、海側の石積みの雁木部分は少し海に出る形で改修されるという。その改修に当たっては、現在ある雁木石を使えるものは再利用して積み直し、不足分を新しい石で補うより、県に申し入れしている。

二〇〇〇年三月末の四工区の完成を目標に、遅くても来年秋までには雁木改修や護岸工事を終え、最後に道路拡幅に着手する予定。

マーケットの現場で撤去作業にむけて話し合う市職員

おまけの資料(2)　「山陽日日新聞」より

53年振りに向島訪れる

収容先の向島紡績や日立造船

英国兵捕虜

第二次世界大戦中、東南アジアで日本軍の捕虜となり向島町の収容所にいた元イギリス人兵士が2日午後、約半世紀ぶりに収容所や働いていた造船所を訪れ、想い出に浸っていた。

レンガ塀の向島紡績を指さすウィドレイクさん(右から4人目)

元兵士の訪日団24人の一員として53年ぶりに来向したのはイギリス・エセックス州、ノーマン・ウィルドレクさん(76)。元空軍兵士、インドネシア・ジャワ島で捕虜となり1942年から終戦の45年の3年間、兼吉、向島紡績のレンガ塀のある建物に収容され、日立造船西工場で働いていた。

英国旗をもった従業員らにあたたかい歓迎をうけたウィルドレクさんは懐かしそうに建物を見渡し、レンガに手をふれ「壁も屋根も当時のままだ。自由の身になり、再び来れたことが素晴らしい。仕事は大変だった。木炭を運んでいた時、尾道の和尚さんにおむすびをもらったことが今でも忘れられない」と感慨深そうに語っていた。

シベリアに3年抑留されていた、同じ捕虜の身を味わった江奥、江頭悟さん(78)から羽子板をプレゼントされ、「サンキュー」と大喜び。

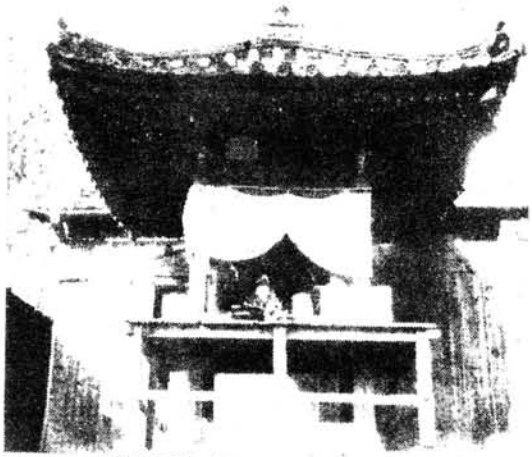
日立造船西工場では「ここでリベットを打っていた」と話していた。

夜はグリーンヒルホテル尾道で向島町のコーラスグループ・歌の島混声合唱団の英国民謡に耳を傾けていた。

向島には英国空軍100人が収容され、終戦までに23人が死亡した。

三重県紀和町で死亡した英国人捕虜を住民が墓碑を作り、供養したことを知り、5年前から訪日団が結成され、毎年平和公園や因島市など訪れている。

抑々此の地は、往古、神功皇功三韓御征伐御凱旋の砌御着船せられたと云ふ由緒に基き、寶龜元戊年、參議藤原百川が程近き山腹に八幡宮創建と共に巨石の側に小祠建立、金石社（カネイシシャ）と呼び、御神水として穿井、記念の御幸松を植えられしに始まつたと傳ふ。其後永く榮えたるが、文治三年、八幡宮移轉と共に、此祠漸次衰退に傾きたるも尚、貴船金石神として存在した樣であるが、其の後戰國の世となつては見る影もない有樣となつたといふ。かくて天文年間、蘆田郡泉山城主宮常陸介元清が、毛利元就に攻落され、其弟宮元春が姻族品治郎相方、佐賀田城主有地氏家士有地玄蕃頭に頼つたが、同城も神逕城主杉原盛重に攻落され、玄蕃、元春共に逃れて落ち延び向島兼吉に身を隱したといひ、其の落城の戰に玄蕃が左眼を射拔かれしに、日頃信仰せる城内地藏尊が身更りとなられ無事を得たとて城内を去る時、地藏木佛を背負ひまして此地に來り住む中、俗家中に置くは勿體なしとて時の里正六右衛門に乞ふて金石神社の境内に小茅堂を建て安置せるに始つた、其の後、佐賀田城が豊太閤の命に依つて山城から平地の城に下つた時、此の由緒によつて、同城内にあつた地藏尊伽藍及大師堂全部を貰ひ受けて此地に移したものだと傳ふ。今も玄蕃の子孫とて相方を稱する者、宮元春の子孫とて宮本を稱する者もある。



（照參堂藏地場し渡給口）堂師大場渡

（余白があるので）　**資料を追加**

伊能忠敬は松永湾沿岸の村々～尾道～向島・岩子島などの島を文化三年二月に測量しているので紹介します。

（文中の人物名は長くなるので人名の多くを省略している）

『伊能忠敬測量日記』の『第五次測量日記』の中に次のような記述がある。

「文化三年二月五日　曇天。朝六ッ前、藤江村より手分け‥‥戸崎、東の岬より浦崎塩浜後まで測る。にわかに西大風に成り、測量いたし兼ね、陸を藤江村へ帰る。‥‥明六日、浦崎塩浜より金見村、柳津村まで測量成さしむ。‥‥金見、柳津村界より尾道地先入口迄測る。‥‥‥同(二月)六日朝より曇天。‥‥尾道入り口より三原領木原村まで測る。当尾道街道へ三ヶ所繋ぐ。‥‥賀島を測る。また向島の中を測る。坂部、稲生、浅五郎、丈助、浦崎塩浜より金見村、柳津村境まで測る。八ッ頃尾道駅へ着く。‥‥同（二月）七日朝より晴天。高橋、下河辺、浅五郎、栄次惣兵衛、向島より東村、西村の内余先浜迄測る。‥‥蛇（クチナハジマ）より初め西村の内余先浜にて合測。‥‥西村内島崎尾道天満屋冶兵衛別荘へ着て止宿。家作広く庭園大いに景色よし。此の夜晴天、測量。同(二月)八日　朝より晴天、六ッ頃、向島西村宇島崎出立。‥‥鰯島一周を測る。‥‥大鯨島、小鯨、大細島、小細島を測る。‥‥‥‥‥(以下略)

出典（「しまなみ人物伝　村上　貢　海文堂」より「第一部　伊能忠敬～尾道周辺の測量」から転載。

（跡城）景全島歌小

向嶋岩子島史

昭和初期の兼吉渡船の風景　向島町史

兼吉渡船

文政四年の尾道絵図（現在と当時の地形の違いをみよう）

文政九年の尾道絵図（「瀬戸内の港町の歩みのあと」　尾道商工会議所百年史　より転載）

昭和30年頃の尾道駅前　前に立つ像は国貞勝三氏作「汀の女神」現在千光寺公園にあり

左にある写真は昭和30年頃の駅前の風景だが、現在、この建物は右の空き地のところにあった。　また「きせんのりば」はホテルのところに移っている。

大正末期の尾道風景

尾道…セピア色の記憶 絵葉書に見るありし日のオノミチ

尾道…セピア色の記憶 絵葉書に見るありし日のオノ

尾道…セピア色の記憶 絵葉書に見るありし日のオノミチ

尾道…セピア色の記憶 絵葉書に見るありし日のオノミチ

「尾道・・・・セピア色の記憶　絵葉書より」（尾道学研究会）

大正末期の尾道風景

大正末年の尾道港　大阪商船が寄港している

大正末年の尾道

Whole View Onomichi.　　（四其）　景全港道尾

同　尾道港の中部－土堂から住吉浜　右後方に天寧寺の塔

（「瀬戸内の港町の歩みのあと」　尾道商工会議所百年史　より転載）

大正末期の尾道風景

大正末年の尾道風景

Whole View Onomichi. （二其） 尾道港全景

同　尾道港の東部－防地川から川端　正面は裁判所

Whole View Onomichi. （三其） 尾道港全景

大正末年の尾道

同　尾道港の中部－十四日　久保

（「瀬戸内の港町の歩みのあと」　尾道商工会議所百年史　より転載）

備陽史探訪の会

【事務局】
〒720-0824　広島県福山市多治米町5-19-8
TEL　084-953-6157
E-mail　info@bingo-history.net

公式サイト
http://bingo-history.net